OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	不登校を語ること ： 不登校の「私」性
Author(s)	栗田, 隆子
Citation	臨床哲学のメチエ. 1998, 1, p. 2-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7134
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集：第１回臨床哲学研究会（７月２日（木））　報告集

学校を考える――『不登校』という現象を通して

イントロダクション：臨床哲学研究会も今年で４年目を迎え、これまで毎回異なったテーマのもとに様々な現場の問題について議論してきました。今年度の研究会では「教育の現場」にフォーカスし、「不登校」という現象を通して教育の現場が抱える様々な問題に継続して取り組むことになりました。そこで今回の研究会では、当研究室の院生と研究生に、不登校者本人の視点、親の視点、教師の視点という複眼的なパースペクティヴから発表をしていただき、一面的に語られがちな不登校の問題を多面的に映し出すことを試みました。本特集では３人の発表とディスカッションの抜粋を収録しました。（編集部）

不登校を語ること ―― 不登校の「私」性

栗田　隆子

(0) 「私」のアウトライン

私の不登校について話す前にまず私の友人の話をしたいと思います。

私が中学三年のころに、転校生としてやってきたその人と、友人になったのですが、その人はしばらくして学校に来なくなりました。「経済的・身体的な理由ではない長期欠席」、つまりは不登校（そのころは登校拒否という呼ばれかたが一般的でした）でした。私はその頃その人について「弱い人」だとか怠けてるだとか思ったことはあまりないと記憶しています。その人を不登校をしているという理由で嫌った覚えはないのに、「不登校」を私自身が経験したそのさいに、なぜ、あんなにも動揺し、自分のことを弱い人間だと思ったのか、と苦々しく感じます。

私は、すでに中学二年のころから学校に行ったり行かなかったりを繰り返していました。けれども本格的な不登校、自分の学校やその他のことに対するいままでの「価値観」をゆるがすような不登校をしたのは高校一年の時です。その年の九月にいったん「休学届」を、その翌年の三月には「退学届」を提出しました。その間に、知的障害の人の通う作業所（畑仕事を中心とした）にボランティアとして通いはじめ、結局二年間ほど、そこの作業所にお世話になっていました。ボランティアというより、私の方がケアされていたという思いが強く、お世話になった、という表現がふさわしいです。

そこのスタッフの方でが不登校の経験をしていたという人がいらして、その人が通信制の高校を卒業していたということもあって、退学届けを出した一月後の四月に、通信制高校に入学しました。

そのころは大検ということは考えてませんでした。なぜなら、そのころは大学に行くために高校に行こうとしたからではなく、高卒の資格が欲しいからでもなく、高校の勉強がしたいと思ったからです。そこには、国籍もさまざま、年齢も上は七十から下は十代半ばまでといろいろな人が在籍していました。大人の方の勉強熱心さにおどろき、

彼らから私も「勉強」というものに対する「能動的なありかた」を学べたと思います。

通信制高校はとにかく自分の時間があるところで、地域の公民館で開催される講演会に主婦の方にまじって参加したり、作業所でのボランティアの他に、看護助手のアルバイトも経験できました。それからは、多少の紆余曲折はありましたが、とりあえず今に至っていると言ってよいでしょう。

さて、それではこれから実際に私が不登校をしたうちで、何を感じ何を迫られたのかという話をしてゆきたいと思います。

(1)不登校を語る際に「私」にこだわる理由

私自身が、不登校（私が経験したころは「登校拒否」と呼ばれることが多かったが、ここでは名称の違いにこだわらない）をしたときに辛かったことの一つは、不登校をしている人間ということで、一定の枠にはめられて自分が見られるのではないのかというおそれでした。しかも、その不登校をしていることによって「悪人」、「怠け者」というレッテルが貼られてしまうことを恐れていました。先程話したように、友人が不登校をしていることに対しては悪いことを彼女がしているとは思っていなかったはず、なのに、いざ、自分が経験すると非常に悪いことをしているような気持ちになりました。私自身の価値観がそのような価値観の枠組みに縛られて、身動きがとれなくなってしまっていたことがもっとも問題だったと思います。

マスメディアなど、教育をめぐる言説はともすると「こども」「高校生」などと言葉で区分けすることで、その子どもなり高校生なりを「十把ひとからげ」に括る視点がつきまとっているように私には感じられます。「不登校」という言葉もまたそれをしている人をすべてひとくくりにし、個々の豊かな生、苦しみ、喜び、を感じる一人の人として生きているという事実を見えにくくさせてしまうようです。

そこで、私は、「私」の不登校、すなわち「私」性にこだわることによって、不登校をしているか、していないかという視点だけ子どもをみるような「枠」を取り外すことができたら、と考えています。枠を取り外すということがとりもなおさず、不登校をすることが良いとか悪いとかを言うだけの価値規準で考えることから、一旦は抜け出すことが出来るのではないかと私は思っています。

まず不登校ということが誰の、いかなる問題であるかということが、話しをする上では重要であると思います。というのは、あとでまた触れますが、不登校にかこつけて違うことを主張しているケースもあるからです。私は、この問題の「現場性」から離れる言動をしたくはないと考えています。まず、私は本人の立場として、不登校がいかなる問題であったかを話していきたいと思います。

(2)不登校する子どものなかで内面化する「学校」の価値

ａ．「不登校」であることへの極端なおびえ、嫌悪

私自身が、不登校（もしくは「登校拒否」）をしたときに辛かったことの一つは、不登校をしている人間ということで、一定の枠にはめられて自分が見られるのではないのかというおそれであると言いました。ある意味で、不登校を「悪」と捉えてしまう傾向が最も強くみられるのは本人の心の中だともいえます。不登校が「悪」であると思うからこそ、「悪」ではない、「病」であったらいいと思いもしました。実際に病に苦しむ方に失礼であると思いながらも、病という、ひとから認められる「居場所」、

自分の状態が「こうである」と表現できる言葉のあることがうらやましかったのです。しかし、私のからだが「行くべきである」という気持ちを無視するように動けなくなることもまた事実でした。

実際「行く」「行かない」でなぜここまで葛藤が生じてしまうかといえば「行きたくない」という気持ちと同じくらい「行かなければいけない」という気持ちが根深くあるからです。これは「学校が好きだから行きたい」という欲求の気持ちではなくあくまで、義務のような気持ちです。しかしとにかくその「行くべきである」という気持ちが強かったことは事実です。

「行かなければ」と思っている場所に「行きたくない」という自分の気持ちを認めることは、本当に勇気がいるとしかいいようがありませんでした。なぜなら、自分の居場所は、そこしかないと思っているのに、その居場所に自分がいたくないと気がついてしまったら、自分の生きているなかでの居場所がない、という結論が生まれるからです。「行きたくない」という主張、または、「なぜ学校とは行かなければならないのか」という問いが、そのときなぜ出来なかったのかということを次に話したいと思います。

b．自分の主張を訴えるための「前提」がない

「問う」ということは当然、問いを聞く相手の存在を考えなければいけないと思います。というのは子どもが問うその相手とは大抵子どもと同等の立場のものではなく、力が上の相手であるからです。その相手に問うということは、非常に「力」のいることで、その力というものが子ども自身だけで、生み出す方法があるのかどうか、それは私にはまだよく分かりません。

そしてもうひとつ、問うということに意味があり、それは無視されるべきものではないのだ、という価値観が浸透していなければ、子どもからの「問い」は生まれ得ないのではないでしょうか。問いが生まれ、そしてそれが表現できるまでになるということは、まさに教育の賜物のような気がしてなりません。

ここで、さらに具体的な話をしたいと思います。

私は、高校受験の三ヶ月ほどまえ母に進路の話をするときに「定時制に行きたい。普通高校にはあまり行きたくない」と話しました。

母親はそれに対して、「何いってるの」という調子でまともにとりあってもらえなかった覚えがあり、私もそれ以上言葉を続けることが出来なかった記憶があります。母は決して悪気があって私の話を聞こうとしなかったわけではなく、ただ、そのような投げかけが彼女には、まったく信じられないものだったからでした。これはのちに母親自身がそのように私に話してくれました。学校の先生にはそのようなことを言うことすらできませんでした。それは、先生にそのようなことを問う密接な関係が築けなかったからで、その当時、私はそのような先生のあり方を、恨む気持ちはありませんでした。目立った部分もないそれこそ”普通”の私に興味がないのが当たり前だろうという価値観を私自身がもっていたことにその原因があると思われます。

私のまわりでそのように「問う」ことの「意味」を考えているひとはほとんどいなかったように思えます。少なくとも私にそれを教えてくれたひとはいませんでした。それについて弾劾することは避けます。今まさに不登校に直面している子どもの親、教師を責めたてても何の解決にもならないからです。

ただ、そのように「問い」の切れ端を投げかける相手が現れた場合、どうすることが必要なのかを周囲の大人は考えなければならないと、いまの私は思います。ただ、それが問いであることに気づくことができない、そういう事態がまずは起きることも

考えられます。それをどうすればよいのか、私にはまだ、その答えは出ません。

問いというものがなぜ、軽視されてきたのか、また問うことそのものの意味をまず把握し、そしてどの様に教育していくのかということがこれからの課題なのではないかと私は考えています。

ｃ.問うことの出来ない「学校」の持つ意味

私は、小学校から中学校の半ばまでピアノや水泳などを習っていました。それは、とても私にとっては楽しいものでした。というのはどちらも「好き」なことだったからです。なぜ問うことの出来ない「学校」の持つ意味、を話すにあたって、このようなピアノやスイミングスクールの話をするのかといえば、私はなぜ、このような場所を自分の居場所として大事に出来なかったのか、なぜ、学校に居場所を見つけようと悪戦苦闘し、その結果ピアノやスイミングを好きであったにも関わらずやめてしまったのか、がとても気になっているからです。それは先程申しましたように、価値観の問題が考えられます。私の場合、学校にいるということは非常な労力を使うことで、水泳やピアノにまわすパワーがなくなってしまったのです。なぜそんなに学校にあわせなければならない、と強迫的に考えていたかといえば、「好き」なことをするというのはこの人生においては意味がない、嫌いなことを耐えてやることで始めて「力」がつくのだ、といま思えば驚くほどストイックなことを考えていたのです。さらに学校というものが家庭や、他の習い事などの「居場所」よりも「大事」な特別な場所なのだと考えていたのでした。

嫌いな学校に無理矢理行くことと自分の価値観との「折り合い」をそこでなんとかつけていたのだと思います。皆さんも私の話を聞いていて気づかれたかもしれませんが、私はわりと「価値」ということにこだわりを持っていた方だと思います。そこが不登校をする人間にありがちな神経質なところなのだ、といわれてしまうかもしれません。不登校をしている人間が、なぜ不登校をするのかといえば、そのひとの性格にも原因があるというのはある側面において真実です。ただ、その際にその性格が即「悪い」ものであること、そして「不登校」という行動が即「悪」であるという枠組みを取り去った上で指摘するのであれば、の話です。なぜなら、学校に行っている人であっても神経質であったり、こだわりを持っている人がいるわけで、それなのに不登校をした場合、まさに「不登校」をしたというその事実があるゆえに、そこから神経質であったり、性格の短所がことさらクローズアップされる、その性格が「不登校」の原因として語られるのは、非常におかしいと感じるからです。

(3)「不登校」（登校拒否）する人間の感じてしまう居場所のなさ

ａ.なぜ、死をかんがえるまで追いつめられていくのか？

不登校をすると（十年以上昔に不登校をした場合は特に。親のせい、本人のせいといった見解が主流であった時代であったので）かなり追いつめられて、死を意識するひとも多いとおもいます。このことは通信制の高校に進学したときクラスメートと話したことの一つでした。彼女が「失恋なんかどうってことないよ、この苦しさに比べれば」と言っていたことがとても印象的でした。不登校になる、ということは生きていく「前提」の根源がなくなる、足許の崩れ落ちる感覚なのです。

不登校に関しては「行きたくても行けない」という表現がよく使われます。私が最初に親に口に出していったことは、この科白でした。「行きたくない」という（実は本

音の）自分の気持ちを無視をすると、あたかも身体がそれを忠実に私に知らせてくれる役割であるかのように、体が動かなくなりました。だから「行きたくても行けない」というより「ほんとは行きたくないけど、自分の居場所はそこしかないから、行くべきと考えおり、だから行きたい。しかしもはや体が動かない」という表現が私にとっては適切でした。この「行きたくない自分」というものが象徴する価値観、生き方はとても恐ろしいものと思っていたのです。そのような生き方はこの社会のなかで生きていくことのできない「破滅」的なものと感じたのです。まっとうな生き方の出来ない自分には何の力もないと思う、学校に「行けなくなる」くらいだから何をしても駄目だと思う、自分と学校をとりまく人間が愛せない、ひいては死んだ方がよいのではないか、と考えが繋がっていったのです。しかし、そのような学校至上主義的価値観はいったいどこで身につけたのか？ということが問題になっていきます。それがこれからの論点となります。

b．周囲との関係

私の場合、友達間のイジメや齟齬というものは、いつでもつきまとうものでした。もちろんそれも辛かったのですが、それは私にとっての本格的な不登校にはつながりませんでした。ただ、中学の時は、「年間欠席五十日をすぎると、教育委員会に報告するか、職員会議にかかるか、ともかくなにかが起こる」ということを聞いたことがあったので、それを数えながら休む子どもではありました。しかし、そのときなぜ本格的な不登校をしなかったかと言えば、先程言った「ストイック」な価値観のおかげ、学校に行くことが自分のためになる（それがどういった、ためになるのかは考えもせずに！）と思いこんでいたからでした。

不登校をするきっかけというものは、一応あります。しかしそれは一見とてもささやかに見えることです。それは何かといえば、母の高校の卒業生が書いた文集を読んだ、ということでした。

ひとことで言うと彼らはとても「自由」な（それはただ、明るい青春をおくっていたというだけでなく、暗さのようなものを抱え、それを全面に出してしまうようなタイプの人でも、その学校には居場所があったという意味の「自由さ」なのですが。ちなみにその高校はいわゆる進学校でした。）高校生活を送ってきたということをそれぞれの筆致で書かれており、それが私のいままでの学校生活、そしてそれほど進学校ではない私の高校とはあまりにもかけ離れており、茫然としました。

しかもその人達は現在はこの社会に居場所のある大人として生活ができていると知った時点で、私の「学校」に行かねばという気持ちがそれを読む前より薄れてしまったのでした。自分の受けた苦しみをいままでは「必要なもの」「意味のあるもの」と思いこんでいたのに、それが崩れてしまったように感じたからです。しかしそこからが、私の本当の気持ちと「すべきである」という義務の気持ちとの葛藤の始まりでもあったのでした。しかしというべきか、やはり、というべきか、そのような「自由」な高校生活をおくった私の母は、私のそのような学校に行きたくないという気持ちを最初はなかなか理解は出来ませんでした。むしろ私があまりにも追いつめられた様子でいるのを見て「死ぬよりはましだから」という理由でとりあえず学校に行けとは言葉で言わなくなりました。（ちなみに父親は最初から最後まで何も言いませんでした。いまでもきっと私の不登校ということがなんだったのかわかっていないかもしれませんが。）高校の先生も、最初から最後まで理解できなかったようです。私自身もそのころはまだ、自分の気持ちを整理できるほどの力もなかったので、ともかく無事、休学、そして退学ができればよいとしか、考えられませんでした。実際、彼らは「悪気」が

なく、一生懸命だったし、彼らに対してあまり何かを言うことが当時はできませんでした。余談ですが、私は退学届を出した、最後の日、あの恐ろしくて入れなかったはずの教室に入り、
「高校を今日でやめます」
とクラスメートに宣言しました。それは、なにか反抗心のような気持ちだったように思えます。「退学の挨拶を礼儀正しくする不登校の学生」という奇妙な行動をとることで、一括りにされる「不登校」の枠をとりたかったのかもしれません。

話を戻しますと、つまり周囲の人間は「悪気」がないからこそ、私の「違う生き方」というものに気がつくことが出来ない、また違う価値観があるということに気づけない。「無意識」で私を自分の物差しで測っていたという感じでした。本当に悪気はなく。だからこそ、私も「親が、教師が、友達が悪い」と言えなかった。それにその彼らの抱いている価値観が私にとっては「違う」とも言えなかった。また「社会が悪い」ということも、それは結局自分の性格の悪さを人のせいにするのではないかと思ってそれもできなかったのでした。

自分も悪い部分があると同時に私だけの責任ではない部分もあると分かり、反発ができるようになったのは、高校一年の秋に一旦休学届けを出した後からで、しかもその矛先はすべての責任が母親にあるとでも言うかのように、母親にまずは向けられてしまったのでした。少なくとも、母親にあるのなら、父親にもまたある筈なのに。しかしその後は単に母親、父親だけの問題ではない、その不登校をとりまき、そしてその根っこにある社会の価値観とそれを受け取る個人の問題として考えるようになっていきました。

そして実際に不登校に対して社会的な差別がある、そして差別意識が個人のうちに巣くってる、と感じることは逆に今のほうが強く感じる場合もあります。私もきっと不登校をする以前は、その枠組みのなかで呑気に生きていたのでしょう。

私は通信制高校にその後進学し、それを説明するとき不登校であったことにも触れたりして人にあえて隠していません。すると、そのときは何も言わなくても、たとえば私は卒業するときに大学の教授に、しかも数人に酒の席で「栗田さん、大学院でも不登校にならないでくださいね」と彼らはあくまで冗談のつもりで言っていたからです。私はちなみに大学では不登校はしていないし、彼らは私の不登校の様子を知らないにも関わらず、です。私はそのとき、「なんで不登校をしちゃいけないの」と思い、返事はしませんでした。あと「あなたみたいに明るい不登校はいいけど、暗い不登校はいけない」といった人もいます。確かに不登校には様々なかたちがあるのは事実ですが、良い不登校、悪い不登校がそのときの「暗さ」「引きこもりの度合い」で決まると言うところにはなにか、私を苦しませた「価値観」が潜んでいるような気がしました。それはある種の決めつけ、明るい子どもらしい子どもがいいといったような、ところがあるのではないかと、思います。

ｃ．マス・メディアについて

別に「逸脱」をしたくて、不登校をしたわけではなかったのですが、しかし、マスメディアにおいては不登校も逸脱行為、問

題行為であり、野放しにしておけば大変なことになるといった書かれ方がされていたりします。それによって「私は大変なことをしている問題児なのだ」とマスメディアの価値観がまさに自分のものとなってしまう、まさに「不登校フォビア」となってしまいました。いま、実際に不登校をしている子どもの人生を力づけてくれる言葉というものが、どう生まれてくるのか、とくにマスメディアのなかで、そのような言葉は生み出せるのか？と少し意地悪に思うときもあります。不登校を語っているようで、じつは違うことを語っているような言説が多く、それをすべてなくせ、とは言いませんが、ただ不登校をしている子どもにとって、それがどういう影響を与えるのか、力になるのかどうか、という視点がもう少し欲しいと思っているのは事実なのです。

(3) いま思うこと
――ここで私の語ることの意味

私は、「不登校」を経験しました。しかし「不登校」が私のアイデンティティの全てではありません。そこに、凝り固まることは学校と言うところでしか結局自分の居場所が見いだせない過去の私と大差ないように思え、むしろ心理学・教育学とは違ったところに身を置きたい、もっといろいろな言葉で自分を語れるようになりたいと思って哲学を選びました。まず、私がこのように公の席でみずからの不登校を語り、自分である程度納得のいく言葉を紡ぎ出すためには時間が必要で、まさに十年近い歳月が必要だったのだといえるかもしれません。それがまず「今」私が不登校を語る理由の一つです。

この前の日曜日に、「学校に行かない子と親の会」というところに行って来ました。私は、やはり「不登校」というところで苦しむ、そのお母さん（お父さんも若干名いましたが）たちとは、違う立場であり、私はもはや自分がその現場にいた時代からは隔たってしまった（自分が親になるかも知れない未来にはどうなるかは分かりませんが）ことを強く感じました。

言いかえれば、不登校をしていた「私」はもはやいまの私ではないのです。不登校をしていた「私」は私の中の他者なのです。その他者をみつめ、その他者の言葉を紡ぐことが、実際の他者を見つめるということに、しかもそれは自我の延長と言うことではなく、他人そのものとして見つめるということにつながればいいと思っています。ただ、いままで話してきたことは本当に私個人の話で、それがどこまで、他人と繋がることのできるものとなるか、また不登校の「私」性を大事にすることが、他人の「不登校」を理解することにどうつながるのかという問題もあります。

当事者 --「私が不登校を今している」-- ではない、しかし「不登校をしている私」は最も近くにいるともいえます。その「私」は私の中の＜他者＞と言い換えられるかもしれない。その＜他者＞を常に意識するという「不安定さ」こそが、現場や思想にとっての「力」となるのではないか、と考えています。ただ、それがなぜ力になるのか、また果たして私が考えるように力となりうるのかということは、これから十分に考えていかなければならないでしょう。

そしてこの場合の他者とは標題に上げたように子どもという言葉で表現したいと思います。子どもといっても実際の子どもではなく、ここでは、シンボリックなものとして使っています。子どもとは言葉を出せない、自分の表現を持つことの難しい存在を象徴した言葉です。大人としての私とその子どもは「対等な」関係ではないのですが、しかしその子どもなくして大人の言葉も生まれない、その意味では一方的な関係ではないのです。その言葉が出なかった＜私＞とそこから言葉を持つ＜私＞との関係性をこれから考えてゆきたいと思っています。

サン・テグジュペリの『星の王子さま』のなかの有名な言葉を最後に引用したいと思います。

「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。（しかし、そのことを忘れずにいるおとなはいくらもいない。）」

このような言葉は本当に子どもであった頃、心に響くのではなく、大人のための言葉であると思います。言葉を持たない、それゆえに簡単に自分の中から消え失せることもあろう、子どもが私の中でどう生き続けるのか、また生き続けることが出来るのか大人になった今問われているような気がするのです。

（くりたりゅうこ・博士前期課程）

と思っている、そういう矛盾したところに立たざるを得ない「親」の立場から、報告したいと思います。

また、彼はいまごく普通の中学生として通学していますし、彼自身、「もうこれから、あんなこと（登校拒否）はない」と言います。けれど、それで「問題が解決した」とか「登校拒否を克服した」というふうには、彼も私も考えていないのです。ただ、今はこういう状態、と言えるだけで、もともと「問題を解決」したり「克服」するような思考形態に最も馴染まないのが、この「不登校」という現象ではないかと思えます。